

正常妊娠におけるPIGF値と母児体格との関係

著者	不殿 絢子, 佐藤 憲子, 宮坂 尚幸
雑誌名	DOHaD研究
巻	8
号	3
ページ	28-28
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003618

正常妊娠における PIGF 値と母児体格との関係

不殿絢子¹、佐藤憲子²、宮坂尚幸¹

1. 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 生殖機能協関学分野、
2. 難治疾患研究所 分子疫学分野

【背景・目的】

PIGF(placental growth factor)は胎盤の血管形成において重要な因子であり、妊娠高血圧腎症の発症予知マーカーとしても注目されている。正常妊娠では週数とともに漸増し、妊娠 30 週頃をピークにその後漸減するが、PIGF 値の生理的な個体差に着目した研究は少ない。正常妊娠群における妊娠中期および後期の PIGF 値と母体背景因子および胎児発育などの周産期予後との関連について検討した。

【対象・方法】

本学大学病院にて分娩予定の妊婦(24 名)を妊婦健診時にリクルートし、妊娠中期(妊娠 12 週から 28 週)および後期(妊娠 34 週から 36 週)に健診でおこなう血液検査に合わせて母体血を採取した。全血から分離した血清を冷凍保存し、血清中の PIGF 値を後日 ELISA(Enzyme-Linked ImmunoSorbent Assay)で測定した。

【結果】

予備的ではあるが、喫煙などの母体を取り巻く環境が PIGF 値に影響を与える可能性が示唆された。また妊娠前の母体 BMI が高いほど妊娠後期の PIGF 値が低い傾向がみられた。胎児発育との関係については、在胎週数別出生体重パーセンタイル値が 20~80 パーセンタイルの群において、それ未満およびそれ以上の群よりも PIGF 値が高い傾向がみられた。

【結論】

本研究で得られた母体 BMI と PIGF 値との関係は、肥満体格において PIGF が低値であるという先行研究の結果に矛盾しない。また正常妊娠群において PIGF が胎児発育と深く関係していることが確認された。PIGF を疾患予知マーカーとして用いるうえでもそれを規定する背景因子の特定は重要であり、今後サンプルサイズを増やして解析を継続する予定である。